

コラム

四高の煉瓦

当時、煉瓦といえば、輸入煉瓦であり、一枚一枚が真綿紙に包まれてきたと言われるほど貴重なものでした。そこで、煉瓦を地元で焼いて外壁に使用しました。煉瓦造りの指導にあたったのは、加賀藩の陶芸家である諏訪蘇山と無名のドイツ人でした。地元産の煉瓦を使うことに文部省は難色を示しましたが、蘇山は上京し、時の文部大臣であった森有礼の登庁を玄関で待ち受け、直訴して話を付けたとも言われています。諏訪蘇山は、後に李太王（朝鮮）の依頼を受けて高麗古窯を再興し、1917年（大正6年）に帝室技芸員（今の人間国宝に相当）となりました。



3色の煉瓦が使用されたアーチ窓

ピンク色の小屋

四高の正門をくぐって左手に木造のピンク色の小屋があります。今は使われておりませんが、元々は守衛の詰所であった門衛所です。1893年（明治26年）に建てられたものとされ、当時の配置図によれば、現在の広坂通りあたりにあったと思われます。大正半ばの市内電車の敷設に伴う街路拡張や昭和43年の郷土資料館の開館時などにたびたび移築され、現在の位置でひっそりと保存されています。



建築当初と思われる古写真

愛知県の明治村にある四高

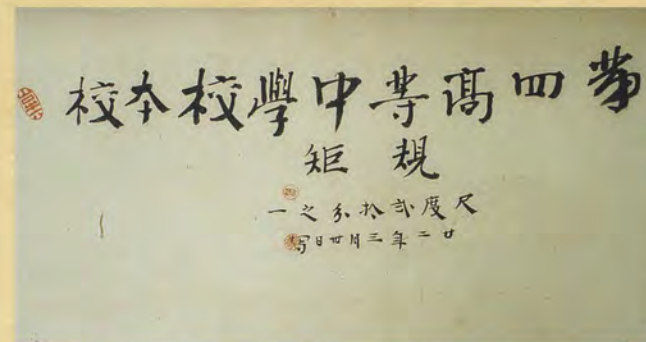
四高の施設は、石川県には本館しか残されておりませんが、愛知県犬山市の明治村には、物理化学教室と「無声堂」と呼ばれる武道道場の2件の木造建築物が移築・保存されています。明治村の初代館長は、四高出身の建築家・谷口吉郎氏で、昭和15年に鹿鳴館が取り壊された際、当時の新聞に「明治の愛惜」と題する文を寄せ、明治建築の保存と活用を訴えました。この谷口氏の訴えに応え、取り壊される運命にあった建造物を救い、これらを保存展示する博物館の構想を支えたのが、谷口氏とともに旧第四高等学校で学んだ名古屋鉄道株式会社社長であった土川元夫氏でした。これが縁となり、愛知県に四高の一部が残されることになりました。



旧第四高等学校物理化学教室 (提供:博物館 明治村)

建築当初の姿を残す大切な文化財

国が指定する国宝や重要文化財には、神社仏閣や地元の有力者の家屋などが多くを占めており、今も昔と変わらない使われ方をされているため、多少の改変はあるものの、建築当初の間取りや構造がそのまま維持・保存されていることがほとんどです。一方で、明治期以降に建てられた軍の施設や行政庁舎、学校、銀行、百貨店などの近代建築物は、時代の変化や老朽化、狭隘化などにより度重なる改変を受け、建築当初の間取りや構造が大きく異なってしまうことがあります。近代建築である旧第四高等学校本館も建築されてから様々な使われ方をしてきましたが、建築当初の外観や構造はもちろんのこと、下図のとおり間取りもよく残されており、大変貴重な文化財であります。



山口半六の押印がある設計図

四高を設計した文部省技師・山口半六は、明治期を代表する建築家の一人であり、旧制高等学校、いわゆるナンバースクールの校舎の設計を行った人物である。四高以外にも熊本県の「旧第五高等学校本館（国指定重要文化財）」も設計している。もう一人の設計者である文部省技師・久留正道は、西洋建築の理論や技術の研究を行い「学校建築設計大要」を著した明治期の学校建築の功労者である。

建築当初の平面図

1階

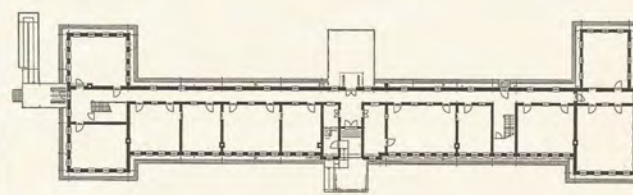


2階

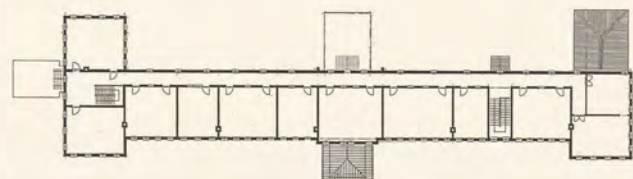


現在の平面図

1階



2階



金沢

レトロ建築めぐり ～近代建築ガイドパンフレット～

〔国指定重要文化財〕

旧第四高等学校 本館

石川四高記念文化交流館

旧第四高等中学校本館 [国指定重要文化財]



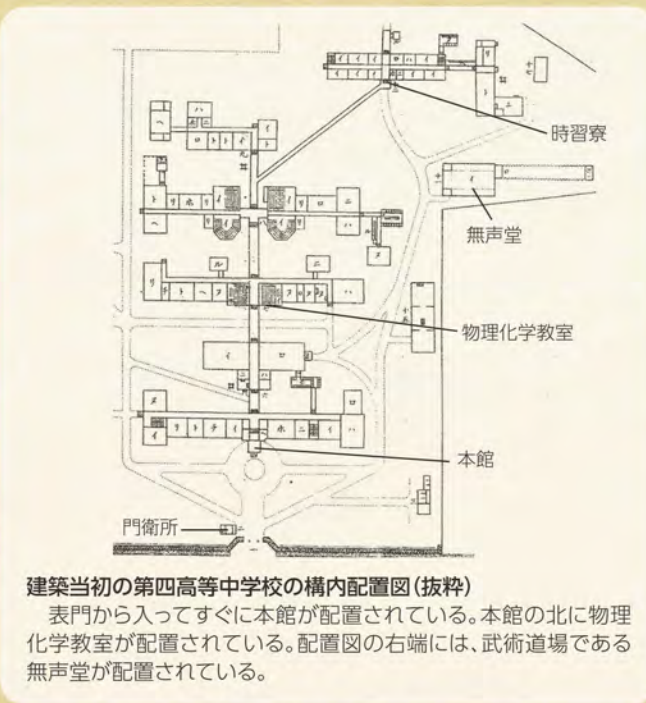
現在の外観
ほぼ建築当初のままの外観であり、堅牢でありながら美しい佇まいである。

数々の人材を輩出した 「学都」金沢を象徴する赤煉瓦校舎



建築当初の第四高等中学校本館

1886年(明治19年)に公布された中学校令により、尋常、高等中学校の設置が決定し、翌年、高等中学校は全国5か所に設置されることとなりました。石川県は、新潟県、福井県、富山県とともに第4区に区分けされ、1891年(明治24年)には、現在地に第四高等中学校本館が建築されました。井上靖や谷口吉郎などの著



建築当初の第四高等中学校の構内配置図(抜粋)

表門から入ってすぐに本館が配置されている。本館の北に物理化学教室が配置されている。配置図の右端には、武道道場である無声堂が配置されている。

名人をはじめとした数々の人材を輩出し、地元で親しまれた「四高」は、1949年(昭和24年)に現在の金沢大学に編入され、翌年には閉校しました。



当時の時習寮正面
四高生は、ここで自治精神に貫かれた寮生活を営んでいた。



閉校後は、金沢大学の理学部棟として使用され、金沢大学の金沢城内への移転後には、石川県立郷土資料館(現:石川県立歴史博物館)や石川近代文学館として使用されました。2008年(平成20年)には、四高の歴史と伝統を紹介する石川四高記念館と石川ゆかりの文学者を紹介する石川近代文学館の2つから構成された「石川四高記念文化交流館」としてリニューアルしました。



復元教室(2階多目的利用室)
元々教室であった部屋に、四高生が当時使用していた机や椅子のレプリカを設置することで、往時の教室の様子を再現している。

文化財区分: 国指定重要文化財(1969年(昭和44年)指定)
年代: 1891年(明治24年)建築
構造形式: 煉瓦造2階建 設計者: 山口半六、久留正道
《建物略年表》
1891年(明治24年) 建築
1950年(昭和25年) 第四高等学校閉校 金沢大学理学部として使用
1964年(昭和39年) 金沢地方裁判所として使用
1967年(昭和42年) 北陸財務局から石川県へ無償貸付
1968年(昭和43年) 石川県立郷土資料館として使用
1969年(昭和44年) 国指定重要文化財に指定
1986年(昭和61年) 石川近代文学館として使用
2008年(平成20年) 石川四高記念文化交流館としてリニューアル

外観は腰廻り、胴廻り、軒廻りに釉薬煉瓦や白煉瓦を用い、壁面の赤煉瓦と強いコントラストが特徴的であり、単調になりがちな煉瓦造建築物を、意匠的に引き締めている。煉瓦は、短い辺を見せた段と長い辺を見せた段が交互に積み重ねられるイギリス積みが採用されている。屋根は寄棟造の棧瓦葺きであるが、棟飾りや雪止めの金物グリルをのせ、煉瓦造の煙突を6か所に建てて、変化を与えている。



明治期の雰囲気を残す廊下
北側に廊下をおく片廊下形式で、1階は主として教員室、事務室、図書室に用い、2階は教室として使用された。